HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第11章 アイヌ民族多住地域としての白糠町の評価
Author(s)	新藤, 慶
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 33, 211-229
Issue Date	2015-05-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59157
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_33_211-229.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第11章　アイヌ民族多住地域としての白糠町への評価

新藤　　慶｜群馬大学教育学部准教授

はじめに

本章では、アイヌ民族が多く暮らす白糠町という地域について、地域住民、アイヌ民族の双方がどのように評価しているかを明らかにすることを目的とする。とくに、白糠町におけるアイヌ民族の位置づけが、この地域に暮らす一般住民とアイヌ民族に、どのように受け止められているかを記述することに主眼を置く。ここから、アイヌ民族多住地域の実態と、今後の展望について考えていきたい。

第１節　一般住民によるアイヌ多住地域としての白糠町への評価

第１項　幕末における白糠のアイヌ民族の役割

白糠町にはアイヌ民族の人々が多く暮らしているといわれる。しかし、白糠町全域にアイヌ民族の人々が広く生活しているというわけではない。町内のいくつかの地域に、多くのアイヌ民族の人々が集まって生活している。そのうちのいくつかは、海岸寄りの地域にあたる。そのため、白糠のアイヌの人々には、ある役割を与えられることもあったようである。古いアイヌ語のフレーズを伝え聞いていたというアイヌの方から、その話を聞いたという一般住民は、次のように語っている。

> 幕末に日本が鎖国を止めた時に白糠の石炭を出したって言ったら、「おう、そうかい」って。そういう話が何かないかいって聞いたら「思い出した」って。「フレシサム」っていうのは赤い人さ。フレは赤でシサムは隣人ね。ペンザエというのは、変な。見たこともない変な船を見たと。浜で遊んでいてそんな船を見たら、何をさしおいても飛んではねて驚いて番所に知らせろ、という意味さ。日本史というのはあるのだけど、別な日本史があるんだよね。（一般･老年･男性）

つまり、幕末には、外国船がやってきたら番所に知らせるようアイヌの人々に触れられていたということである。その真偽は、詳細な史料調査によらねばたしかめられない。ただ、少なくとも、白糠町におけるアイヌの人々の歴史として、アイヌの人々がいわば「沿岸警備」という「役割」を与えられていたことが語り伝えられており、アイヌと和人の関わりの長さ・深さがわかる。

第２項　労働・教育におけるアイヌ民族と一般住民の関係

それでは、現在のアイヌ民族と一般住民との関係を、まずは一般住民の視点から確認していきたい。白糠町に現在生活する一般住民からは、白糠町に暮らすアイヌ民族は、次のようにとらえられている。

・容姿でわかっちゃうからさ。……名字を聞けばだいたいわかるから。アイヌ語の名前を日本名に変えたとか。まったく日本名をつけたとか。（一般・老年・男性）
・白糠で漁師をやっている親たちの年代って酒に飲まれる人が多くて、だからそういう部分で、さほど密な関係で友だちになる（ことはなかった。）……まあ疎外しなかったし、ただこっちから飛び込むというのは少なかったと思いますね。……だからとくに飲み屋さんに行っても飲まれてしまって、また目立つから、喧嘩なんかもよくやっていましたね。そういうのを見聞きしたし。（一般・老年・男性）

実際に、白糠町にアイヌ民族の方がどのくらい住んでいるか、正確に把握することは困難である。ただし、白糠町に暮らすアイヌの人々の数については、次のような感覚が持たれている。

僕は昭和20年代[1)]生まれだから、戦後すぐの生まれなんですよね。白糠の人口も26,000～27,000人[2)]ぐらいいたと思うんですよ。それで同期の小中高は50人クラスの５クラスから６クラスあったから、300人ぐらい就学していた小学校も中学校も高校もありました。そのなかで明らかにアイヌという感覚の人間が、だいたいどのぐらいいたのかな……１割から２割ぐらいいたのかな。（一般・老年・男性）

また、白糠町以外の地域からは、「白糠はアイヌの集住地域」とのイメージが持たれていることもうかがわれる。

うちは結婚する時は、親戚が「白糠だから、アイヌじゃなかったらいいんじゃないのっていったさ」っていうのはちらっと聞いたけど……。（一般・老年・女性）

このように、「白糠に嫁ぐ」ということが、「結婚相手はアイヌの人なのでは」という感覚を想起させていたことがわかる。

ただし、白糠町に暮らす一般住民の側からは、基本的に、アイヌ民族だからといって特別な意識を持つことはないという声が聞かれる。

・別にアイヌの人だからどうのこうのって、そんなことを感じたことないね。うちの町内にもそこに１人、嫁さんがアイヌの人がいるんだよね。その嫁さんとよくパークゴルフをやったりするんだけど、全然。もうアイヌだとかそんなことを感じたことないね。【町内会全体でもそういうアイヌだからということは？】ない、ない。今その人に町内会の婦人部長をお願いしているけど。そういうアイヌだとか話したこともないし、そういうことを感じたこともないね。（一般・老年・男性（【　】内は調査者。以下同様）
・もう日常茶飯事、身近にいるから。だって、近所にだっていっぱいいるでしょ。だから、おじさんたちがたまに町内会の用事とかで来た時に「おれはこうだ」とか「ああだ」とかっていうのはちらっと聞いたり。あと、アイヌの人に養子になったとかっていう人、いっぱいおりますから、そういう人たちが「俺はアイヌじゃないんだけども、親がこうやって育ててくれて」（と話

していた)。昔、前はウタリ(協会)とかって。……「俺は、だから、ウタリのやってるんだ」っていう話はしてたりは聞いたことはあります。(一般・老年・女性)

・いま白糠でアイヌ差別というのは、私はそれほどひどいものはないと思っています。職業の差別もないし、結婚の差別もよそから比べたらそんなにないと思います。帯広というところはひどいところだからね、同じ北海道のなかでも。十勝って排他的なんだわ。(一般・老年・男性)

その反面、漁業関係者など、労働の場面でアイヌ民族と接点を持つ一般住民の場合には、アイヌ民族の人々に、「相手がアイヌ民族である」と意識していることを悟られないようにする配慮も見られる。

うちらは漁師だから、船頭さんから、もう主要な人方みんなそっち系統(アイヌ民族)の人なんです。だから、……ご飯炊きさんもみんなそう、その家族とかで。だから、でも一応いわれたのは「うちはそういう人たちと一緒に仕事してるんだから、アイヌとかっていう言葉は使っちゃいけないよ」っては、ここに来た時にいわれてたのね。(一般・老年・女性)

海岸近くに暮らすことの多い白糠町のアイヌ民族の人々も、本研究グループで2013年度に調査を行った伊達市(小内編著 2014)と同様、漁業に携わるケースが多い。そこでは、「私がお嫁に来たころは船頭さん始め、ずっとそういう……、やっぱり本来のそういうものに対しての腕はよかったんじゃないんですか。だから、大概、船頭さんとかそういう人たちは(アイヌの人たち)だったですよ」(一般・老年・女性)といわれるように、船頭など漁船の乗組員として、アイヌの人たちが技術的に優れていたとの評価も見られる。なかには、以下のように、「親方」として大規模に漁業を展開するアイヌの人々もいた。

【アイヌの方たちのなかで、……ご自分のお宅で船を持って……。】いるいる。たくさんいる。……(サケの)定置(網)してた人があったもんね。親方してる人方いましたよ。……私、知ってるだけでも3人も4人も。白糠、あのころは十何か統して、15か統ぐらいしてたんだろうか。それ(アイヌで親方をしている人は)3人4人いましたよ。

白糠町の漁業の1つにサケの定置網漁があり、最盛期には15か統ほどの定置網が設置されていたということである。このうち、3～4か統はアイヌの人々の定置網だったとのことなので、4分の1から5分の1程度の親方はアイヌの人々であったということになる。数字の正確さは不明だが、少なくとも白糠町の漁業関係者の間ではそのように受け止められていたといえる。

そのため、とくに漁業に携わる人々は、アイヌの人々の存在を意識せざるをえない。そこでは、「アイヌの人々を意識していない、特別扱いをしていない」ということを伝えることが求められる。

また、アイヌ住民と一般住民の接点となるもう1つの重要な場が学校である。1950年代に学校に通い始めた一般住民は、当時の様子を次のように語っている。

まず学校でアイヌについて教育を受けたこともないし、アイヌという言い方自体、普通の会

話のなかでそれはまずタブーみたく、そこをよけて通る。それが一般的だったと思うんですよ。まずアイヌ教育というのも全然（行われなかった）。学校のなかでも「アイヌ」という３つの（３文字の）言葉自体、日常会話のなかでも発することは、先生もそうだったのか、仲間同士でも友だち同士でもそうだったのかわからないけれど、きっと僕たちの前の世代から、アイヌという呼び方、それに対するすごく気をつけて（関わっていた）。（一般・老年・男性）

第４項で後述するように、現在の白糠町では、小･中学校でアイヌ文化学習が行われるようになっている。しかし、戦後間もないころは、アイヌを話題にすることもはばかられていたことがうかがえる。

しかし、アイヌを学校で扱った教師も少なからずいた。たとえば、以下のような聞き取りがある。

僕たちがまだ若いころ、白糠の中学校か小学校で松本という先生がいて、アイヌのことを一生懸命勉強して文献も結構残している先生がいたんですよね。その人の授業だと社会科の時間に教科書から離れるんだけど、それがすごく楽しくて面白かったと記憶にあるんですよ。身近にアイヌの友だちがいるんだけど、「この人たちって一体何？」って考えたこともなかった。でもきっと彼らの中には、「俺らのじいさん、ばあさん、ひいじいさんのほうが白糠はずっと古いんだぞ」ときっとどこかにあったんだろうと思うんですよね。【中学校で松本先生という方がアイヌ文化について。】ええ、勉強していましたね。小冊子みたいなのを出したりして一生懸命やっていましたね。【それは自費出版として何か本にして？】そうね。あと白糠の教育委員会だか何かとタイアップしてやっていたんでしょうね。【アイヌ文化について研究とか授業で。】だから教科書から離れるんですよ。社会科の先生だったから教科書から離れていくんだけど、例えば社会で北京原人の話をしているとそこから離れてアイヌのほうへ。そういう先生もいましたよ、なかには。数少なかったけど、そういうのがすごく楽しいなというのが僕の記憶にありましたね。（一般・老年・男性）

この「松本先生」とは、松本成美（しげよし）氏のことで、松本・白糠地名研究会（1985）などの研究に関わっている。われわれのメンバーも、調査期間中何度かこの「松本先生」の名前を耳にした。こういった一部の教師によって、アイヌの子ども、和人の子どもの双方とも、アイヌに関する史実を身につける機会が与えられることもあった。ただし、それは一部にとどまったともいえる。

1950 ～ 1960 年代にかけて白糠で教員をしていた一般住民は、次のように語っている。

そのころね、子どもたちもね、一番困るのは座席替えさ。子どもたちに「座席替えしてくれ」っていうでしょ。替える時ね、アイヌの子と一緒にさせるとね。だってむかしは、両袖の机だから。１つひとつでないから。どうしても、座席替えしたら、２人組になっちゃうわけさ。そうするとね、そのころのアイヌの人たちね、体臭がまだあるわけさ。それからもう１つはね、そのころは、不潔な生活。低レベルな生活だったから、それで、臭いがするから嫌だって。それから、肌の色が違う。そういうので、子どもたちが嫌がったね。だけど、これだけは仕方なくてね。……「差別するな」と、あるいは、子どもたちに「差別したらダメなんだよ」というけ

ども、結局、着ているものは汚い、それから不潔だ、それで肌が黒い子もいたからね。本当に真っ黒って子もいたからね。（一般・老年・男性）

これは、このころのアイヌの子どもたちが通う学校の教師の、率直な感想だと受け止められる。当時はアイヌの人々も、経済的にはより苦しい状況にあったためか、見た目の不潔さだったり、体臭のきつさを感じさせたりするところがあったのかもしれない。その点を、和人の子どもから指摘され、「差別するな」とは指導しつつも、なかなかそれが徹底しない状況に手を焼いていたことがうかがえる。ただし、教師にとっては、「同じ子ども」であるはずだが、どうしても和人の子ども側に肩入れし、アイヌの子どもの側に立つことが難しかったことも看取される。

第３項　地域振興へのアイヌ政策の活用

このように、多くの一般住民にとって、アイヌ民族との関わりはそれほど意識されるものではない。しかし、漁業関係者など一定の労働の場や、教育の場では、アイヌ民族の存在を否応なしに感じさせられることになっていた。

ただし、このアイヌ民族の存在を、地域振興に結びつけようという動きも存在する。元町役場の職員だった男性は、次のように語っている。

国のアイヌ福祉の……要するに同和対策と同じようなことなんですよ。国からの補助金を得て、道路整備をやったり建物を新しく建てたりとかあるじゃないですか。生活館の建設だとか、土木・排水溝だとか、そういうものの仕事が同和と同じように、アイヌの人たちがそこに住んでいれば、その人たちの地域の環境改善ということでやるのですね。その補助率が事業費の 75% が国からの補助金として、残りは借金、起債ですよね。それで認められるといって積極的にやっていたのですね。当時、白糠にはアイヌの人たちがいるということがわかっていたんですけど、当時の町長というのはＣさんという人で、アイヌにすごく関心を持っておられた人だったんですね。その制度を使うべきだと。その制度を使うことによって、その就業対策もできるのではないかと真剣に考えられていた。（一般・老年・男性）

つまり、アイヌの人々を対象とした補助制度を活用し、白糠町の地域振興を図ろうという考えが、当時の町長にあったということである。

アイヌの人々を対象とした補助制度には、国からの補助金をもとに北海道が進めた一連のウタリ福祉対策事業がある。その嚆矢と位置づけられるのは、1961（昭和 36）年度から５か年計画で実施された北海道不良環境地区対策である（小内 2010: 2）。ここでは、アイヌの人々とそれ以外の人々との「生活面及び経済面、教育面等の格差が大き」いために、「生活環境の改善、住宅の整備、教育の促進」などを通じて「アイヌの人々の福祉向上」が目指された[3)]。具体的には、「生活館、共同浴場の整備など」が進められた[4)]。その後、より「長期的展望に立った総合的な福祉対策として、北海道ウタリ生活実態調査をふまえて北海道ウタリ福祉対策」が実施されることとなり[5)]、1974（昭和 49）年度から「第１次ウタリ福祉対策」が開始された。この後、６年おきに第２次、第３次と続けられ、1995（平成 7）年度～ 2001（平成 13）年度の「第４次ウタリ福祉対策」まで継続され

た。本研究でもよく触れられている「高等学校等通学補助事業」は第２次ウタリ福祉対策で盛り込まれたものであり、現在でも引き継がれているものもある[6)]。1997（平成９）年にアイヌ文化振興法が施行された後は、文化面は「アイヌ文化の振興等を図るための施策に関する基本計画」（1999（平成11）年度から）にもとづいて取り組まれることとなり、アイヌの人々の生活向上については、2002（平成14）年度から「第１次アイヌの人たちの生活向上に関する推進方策」として新たに取り組まれることとなった。現在は、これの第２次の方策が実施されている（2009（平成21）年度～2015（平成27）年度）[7)]。これらのアイヌの人々を対象とした諸施策を活用して、白糠町の地域振興が図られた側面があるということである。

なお、このＣ元町長は、アイヌ民族への深い問題意識を持っていたことが、他でも聞かれた。たとえば、土地に関して、以下のような話が聞かれた。

> その前のＣ町長が（いうには、昔和人が）アイヌから土地を取り上げたと。……西４条何丁目だとか東何条目何丁目とかね、条丁目にしてしまったと。だから白糠町マサルカ何番地というのがなくなってしまう、住居表示がね。それに対して忸怩たる思いがあると。……初めてその時わかったんですけど、基線号線って言葉ご存知ですよね。これは北海道植民の歴史だと。……だってある日突然に、ここに標柱を立てて東西に線をつけて、真北に向かって基線にして、それで100ｍだとか200ｍおきに東１線、２線とつけて。今度は南北に号だよ。１号、２号、３号というふうにして。南１号だとかしてやっていっちゃうんだから。高札立てて、土地を所有したい者は、何月何日までに申し出るようにと。アイヌの人たちは字が読めないから。日本語なんて読めないから、（土地を）取り上げたも同然だよね。（一般・老年・男性）

後半は、調査対象者の考えではあるが、アイヌ民族が土地を収奪されたことが地名のつけ方からうかがえること、そして、そのことに気づかされたのはＣ元町長の主張によってであったことがわかる。

このアイヌ民族に配慮した町政は、現在も受け継がれているとの受け止められ方もある。

> 【アイヌといわゆる和人との交流の場を設けることについて、いま白糠町では何かやっているとお感じになりますか？】やっていると思いますよ。……伝統のアイヌ料理とかね。【……活発に活動されているということで、現時点で白糠町のそういう政策というのはうまくいっていると思いますか。】思いますよ。今の町長も一生懸命やっていますもんね。【……そうなんですか。結構うまくいっていると。今後もこういうふうに？】あるべきだと思いますね。（一般・老年・男性）

このように、アイヌ民族に配慮したまちづくりという方向性を支持する声が聞かれることも珍しくない。

第４項　アイヌ文化を活用したまちづくり

また、白糠町では、アイヌ文化を活用したまちづくりを意識的に行っている部分も見受けられる。

白糠町では、2007（平成19）年を「しらぬかアイヌ文化年～ウレシパ　シラリカ」と位置づけた。これは、直接的には、当時の北海道ウタリ協会が主催した「第20回アイヌ民族文化祭」と、アイヌ文化振興・研究推進機構が主催した「第11回アイヌ語弁論大会」が、ともにこの年に白糠町で開催されたことが契機となっている（竹ヶ原 2008：5）。

ただし、「しらぬかアイヌ文化年」の実施には、1990年代後半から進められた、いわゆる「平成の大合併」が関係している。この部分について、白糠町教育委員会の社会教育主事である竹ヶ原浩司は、次のように説明している。

> 平成17年1月、白糠町は、近隣市町村との合併協議が進むなか、その進むべき道を住民投票によって選択し、単独の道を歩むこととしました。そして、新たなまちづくりを進めるためには、いま一度原点に立ち返り、足元を見つめ直すことが必要であるとし、白糠町の自然の恵みや人々の知恵を生かす取り組みが検討されました。……原点に立ち返り、足元を見つめ直すためには、白糠の自然のなかで生まれ、はぐくまれてきたアイヌ文化こそ欠くことができない貴重な財産であり、まちづくりの原点を見つめ直す意味においても取り組まなければならない大きなテーマでした。（竹ヶ原 2008：4）

「平成の大合併」は、合併特例債の活用などが可能であった2005（平成17）年3月までにその大部分が実施され、この時期にピークを迎えた。白糠町も、近隣の釧路市、釧路町、阿寒町、鶴居村、音別町との間で合併協議を進めていたが、結局、白糠町は合併せずに単独の道を歩むこととなった。この時の合併協議の枠組みでは、釧路市、阿寒町、音別町が合併して新たな釧路市が発足した。しかし、白糠町が合併に加わらなかったため、旧音別町は飛び地合併となった。

このように白糠町が単独で町政を継続する際の1つの柱が、アイヌ文化であった。そのため、白糠町でのアイヌ文化を活用したまちづくりについては、評価する声も聞かれている。

> 積極的に白糠町は取り組んでいると思います。小学校中学校でアイヌのその特別活動のなかでやっているからね。その名称は変わったけど、アイヌ協会の人たち、アイヌ文化保存会ということになるけど、その人たちが一生懸命頑張ってくれてるので。（一般・老年・男性）

この学校での取り組みとは、町内の小中学校で行われているアイヌ文化の出前講座のことである。白糠町では、1997（平成９）年度から、「総合的な学習の時間」を使って、「ふるさと教育」を実施している。この「ふるさと教育」とは、「地域に根ざし、地域社会の主体性（アイデンティティ）の確立と地域への帰属感や愛情、そして誇りやコミュニティー意識の高まり（形成）を目指す生涯学習と一体のもの」、「郷土の持つよい伝統や教育風土を生かし、自立を目指す全人教育としての郷土教育であると同時に、自然愛、郷土愛、人間愛など愛の統合教育であり、よりグローバルな視点から豊かな人間形成を目指すもの」とされる。具体的には、「環境」「国際理解」「福祉・人権」「歴史・文化」「情報」「産業」「スポーツ・健康」の各領域から構成されている。とくに、語学学習に力を入れており、国語力・英語力に加え、中国語力の育成も目指されている（白糠町ふるさと教育実践発表会実行委員会 2014：13-23）。町内の白糠小学校では、この「ふるさと教育」のなかで先

行してアイヌ文化学習に取り組み始め、これが2007（平成19）年の「しらぬかアイヌ文化年」をきっかけに、町内すべての小中学校（小学校２、中学校２、小中一体型の小中学校１）で取り組まれるようになった[8)]。形態としては、白糠アイヌ文化保存会の会員が学校に出向き、歌や踊り、料理や言葉などのアイヌ文化を子どもたちに伝えるというものとなっている[9)]。

また、白糠アイヌ文化保存会の活動についても把握している人は少なくない。たとえば、「いま年配の白糠のＩさんという人がいますよね。女の人でアイヌの民話とかを一生懸命ライブ活動をやったり、アイヌの当時の料理をもっと一般に広げようとして運動しているアイヌのおばさん連中がいますよね。ああいう人たちをもっと手厚く保護してやって、いろんな部分でやってあげればいいと僕は思いますよね」（一般・老年・男性）といったように、保存会の活動を評価し、行政の補助の拡充も語られている。

一方、白糠町のアイヌ関連の三大祭り（ふるさと祭り・フンペ祭り・ししゃも祭り）については、一般住民からは敷居が高いと感じられるところも見られる。たとえば、次のような聞き取りがあった。

> 何か広報とか見ると、何とか祭りって、アイヌの人の祭りがあって、参加していいのかな、私もいいのかなっていう感じでちょっと寂しい気はしますね。参加できるなら、行ってみてもいいかなと思って。【じゃ、今後はそういったアイヌ祭りとかにもう少し気軽に参加できるような、何かそんな環境づくりとかしてもらえるといいっていうふうな感じでしょうかね。】そうですね、はい。ちょっと近寄りがたくなっちゃってるので。（一般・青年・女性）

三大祭りに関しては、「アイヌのチセみたいなのを作ってというのがありますが、ただ町報とか新聞で、チセのイベントがあったって入場者数が30人とかね。だから多くの人が参加するという数字もあがってないだろう」（一般・老年・男性）という声も聞かれる。「30人」という数字は、それぞれの儀式に直接関わる人数かもしれず、全体の参加者はもう少し多いかもしれない。しかし、関係者以外が参加しづらい雰囲気が存在することはたしかであるようだ。

第５項　アイヌ民族からの要望への評価

こういったアイヌ民族と和人の距離感は、ある種の偏見や事実誤認をもたらすことにもなる。本調査実施の少し前である2014年８月、札幌市の金子快之市議が「アイヌ民族なんて、いまはもういないんですよね。せいぜいアイヌ系日本人が良いところですが、利権を行使しまくっているこの不合理。納税者に説明できません」とツイートしたことが注目を集めており、これに関わった発言が多く聞かれた。金子市議の発言には、本調査の対象者からも賛否両論が出されたが、次のような声も聞かれた。

> 話はそれるけど、道議（正しくは市議）の人でありましたね。ただあの人の新聞で発言したことを読んでみると、一部間違えじゃないというのがあるの。アイヌ民族だということで、いろいろな制度などを利用してそれを返済していない。彼はその部分を極端な言い方であああいう表現の仕方をしたんだろうと思うけど、うん、わかるよな。この町にもあるよ、それが。（一般・

老年・男性）

ここでは、「返済」という言い方がされている。白糠町役場で把握しているアイヌ民族への補助は、（１）教育の就学援助（道）、（２）住宅貸付（道）、（３）生活館運営の補助金（道と町）、（４）白糠アイヌ協会への補助金（町）、（５）ポロコモシリチセの指定管理運営の委託料（町）、（６）白糠アイヌ文化保存会への補助金（町）、（７）アイヌ文化出前講座の経費（町）、（８）台湾の先住民との交流の経費（アイヌ文化振興・研究推進機構など）、（９）八王子（東京）との交流の経費（アイヌ文化振興・研究推進機構など）である。このうち、「返済」の必要があるアイヌの人々への補助制度としては、住宅購入資金の貸付制度がある。しかし、白糠町では、1992（平成４）年が最後の貸付となっており、それ以降の利用実績はない[10)]。そのため、「いろいろな制度などを利用してそれを返済していない」というのは、事実誤認といえる。また、先述のように、アイヌの人々の生活向上の施策を、白糠町全体の生活向上に結びつけようと取り組まれてきたことへの理解も、ここには見出されない。ただし、白糠町の住民の一定の割合が、このような「アイヌ利権」イメージを持っていることは、事実としては確認される。

一方、アイヌ協会のあり方をめぐっては、アイヌの人々の間でも、少なからぬ考え方の相違も存在している。そのことは、一般住民にも、ある程度知られるところとなっている。元町職員の一般住民は、次のように語っている。

> 白糠の場合アイヌのそういう活動をしている人たち、今でいうアイヌ協会に加盟されている人たちがだんだん減ってきていること。その協会に入っている人たちの文化の伝承であると、そういうものになりつつあるということ、これでいいのかなというね。（一般・老年・男性）

このように、アイヌ協会だけが白糠町のアイヌを代表しているわけではないことも、認識されている。この点をふまえれば、アイヌ協会に深くコミットしていないアイヌ民族の人々の意向をもいかに汲み取るかが課題となる。

第２節　アイヌ住民によるアイヌ多住地域としての白糠町への評価

第１項　白糠町内のアイヌ民族の集住地域

続いて、アイヌ住民の視点から、白糠町の状況について確認していきたい。一般住民の調査でも聞かれたが、アイヌ民族によっても、白糠町内にアイヌ民族の集住地域が何か所かあることが指摘された。たとえば、以下のとおりである。

- 【ご主人のほうは上は和人の方ということですよね。】そう。この人方、白糠のＳ（地名）のウタリの人に囲まれて、ウタリじゃないけど、ウタリみたいな。近所がみんなそう。（アイヌ・老年・女性）
- 【お住まいは何だっけ、Ｓ（地名）とか。】そうそう。【何か先ほどから結構、Ｓの方が多いです。この辺。】Ｓの人が多い？　……生まれたのはＳではないですけど、育ったのはＳ。Ｓはそんなにいっぱいいたべか。……一番多いのは今、ここ、昔でいうＮ（地名）という地区なんだけ

ど、この地区が多かったね、結構。今でも多いかもしれない、いる人が。（アイヌ･老年･女性）

･ああ、もう今、自分の今、S（地名）っていうとこにいた時は、もうアイヌの人ばっかりで。【あ、そうなんですか。】はい。近所、みんなアイヌの人ばかりだったんです。……シャモの人って恐らくいなかったと思うんだよね。自分は小学校２年生からいたんだけどね。（アイヌ・老年・男性）

このうち、Sという地域については、次のようなエピソードも語られている。

同じS（地名）にお墓があったでしょう。そこのお墓はアイヌの方、シャモのお墓と分かれていたの。信じられないでしょう、今の人には。私が子どものころ、あれ何年ぐらいだったかな。私が20歳過ぎるぐらいまでには、アイヌの墓とシャモの墓がわかれていたんだからね。（アイヌ・老年・女性）

この女性は60歳代なので、おおよそ1970年前後の話だと受け止められる。そのころは、こういった面でも、アイヌ民族と和人との境界線が可視化されていたことがうかがえる。

一方、白糠町にはアイヌ民族の人々が多く暮らしてきてはいるが、町内に労働の場が限られていることもあり、アイヌ民族の流出が生じていることも指摘されている。

昔の方は（アイヌの人々は）いたよね。今みんないなくなっちゃって。みんな出ちゃって。昔のほうがいましたよ。【そうなんですか。最近は、白糠はそんなに多くないってうかがって。】そんなに多くないんじゃないかなと思う。みんな出ちゃうでしょ、仕事ないから。アイヌの人だって行っちゃうから。（アイヌ・老年・女性）

人口の流出はアイヌ民族に限ったことではないが、逆にいえば、産業が停滞傾向にある白糠町では、アイヌ民族にも他出を強いる状況が生み出されているといえる。

第２項　白糠町におけるアイヌ文化活動

このようななか、白糠町でのアイヌ民族の存在を実感させられるのが、アイヌ文化活動である。白糠町では、白糠アイヌ文化保存会を中心に、アイヌ文化の活動が行われている。ただし、その立ち上げまでには、他地域からの支援が必要であったようである。たとえば、アイヌ住民の１人は、白糠アイヌ文化保存会の発足の経緯について、次のように述べている。

踊りも、白糠には踊りがなくて。踊りをやろうってことで、白糠の親戚が阿寒湖畔にいっぱいいるので、阿寒湖畔の白糠出身の人が白糠まで来て、踊りを教えてくれて。それでみんなで踊りを立ち上げて、いまの保存会があるんですよ。（アイヌ・老年・女性）

このように、阿寒湖畔のアイヌの人々の援助によって、白糠アイヌ文化保存会の活動が始まったことがうかがえる。

また、これ以外の一般的なアイヌ民族の伝統行事についても、他地域からの支援がある。

・（行事などを）地元でやれる人がいないから、地方から来ているんですよね。その都度その都度やる人が違って、いまは阿寒のほうから来ているみたいですけど。前は釧路の人で、シャモの人ですけど。……アイヌのじいさんばあさんにもらわれて育った人が、ずっと、じいちゃんばあちゃん（が）やっていたから、……自分ができるようになったんですよ。それで、白糠で誰もやれる人がいないから、そのじいちゃんが釧路からわざわざ来て、やってくれたんですよ。シャモなんだけど、アイヌのことをいっぱい、そういうこと知ってた。（アイヌ・老年・女性）
・ちょこちょこお祭りだっていっても、１回、ししゃものあれで行ったけど、なんかずいぶん少ないねみたいな感じで、そんなでもない。ちょっとあっちのサロマ湖の方、川湯の方から白糠出身の人あっちにいるんだけど、その人がたを呼んできて、その人がたに来てもらって、アイヌの。ヘルプで来てもらってやってたから。ちょっとここだけでは無理なのかなと。（アイヌ・壮年・女性）

このように、アイヌ民族の地域間での連携が存在し、この連携によって、白糠町のアイヌ民族の活動もより活発なものとなっていることがわかる。この点に関わって、白糠町のアイヌ家庭には、あまりアイヌ文化が受け継がれていなかったとの指摘もある。

【S（地名）って、アイヌの方が住んでいるところだって聞いたんですけど、そんなに伝統的な暮らしをしてる人はいなかったってことですか？】白糠にはそういうの、ないんじゃないですか？【じゃあ、家の中に宝物があるとか、イナウみたいなこう、削った物があるとか、そういうこともなかったですか？】わかんないです。うん……。（アイヌ・老年・女性）

その一方で、根室から白糠に移ってきたアイヌ女性は、次のように述べている。

【家のなかでね、たとえば、言葉、アイヌ語を使うとか、あるいは周りにね、入れ墨してるおばあちゃんいるとか、そういうことは？】ない。全然見たことない。【そういう、見たことない。】うん。白糠来て初めて見た。【ああ、そうですか。じゃあ根室にいる時は、たとえば、イナウがあるとか、囲炉裏があって、その周りで何かするとか、そういうことは全然なかった？】なかったです。【ああ、そうですか。じゃあ、白糠に来てからはあったんですね？】そう。（アイヌ・老年・女性）

これらの話をつなぎ合わせれば、阿寒や釧路、川湯ほどは強固なアイヌ文化が残っているわけではないけれど、根室などの地域と比べれば、白糠にはアイヌ文化が受け継がれているといったように、アイヌ文化伝承の地域差が存在することがうかがえる。

ただし、アイヌ文化には、それ自体に、地域ごとの違いも存在する。白糠出身で、現在は釧路に住むアイヌ民族の女性は、白糠でのアイヌ文化の活動に参加している。その理由は、「地方地方になると、踊りとかも変わってくるんで」（アイヌ・青年・女性）と語られている。アイヌ文化につ

いては、伝承の程度とともに、伝承される中身についても、地域差があることがうかがえる。

第３項　白糠町におけるアイヌ集住の程度とアイヌ性の表明

これらのアイヌ文化を目にする重要な機会となるのが、アイヌ三大祭りである。ただ、前節で見たように、白糠町のアイヌ三大祭りなどの行事は、一般住民には敷居が高いところがあった。一方で、アイヌ民族にとっても、自身のアイヌ性を地元で披瀝することには、少なからぬ困難が存在していることがうかがえる。

> 小学校とかに上がってくると、アイヌとかっていうのは親が教えてるのかどうなのかわからないけど、あいつはアイヌなんだっていじめが始まったから。そういうのでは遠くの地方地方で踊ったり何するっていう時には、自由きままに踊らしてもらったりしたけど、地元の近くで踊るっていう時には､それこそ白糠の三大イベントのお祭りとかそういう時に踊っていたけど、学校でそういうのを披露しますとかそういう時には、拒絶反応っていうか怖くて、ずっと踊れないではいたんですけどね。【学校とかでアイヌだってなると、いろいろつらい思いとか。】いじめはありましたね。（アイヌ・青年・女性）

この聞き取りは、基本的にはいじめの問題が根本にある。ただし、地元のアイヌ文化活動が、自身をアイヌであると表明することにもつながるという状況が、問題をより複雑にしている。別のアイヌ住民たちからも、次のような語りが聞かれた。

- 白糠町ではそういうの、そういう関係の人、何人かいるようだけどね、あと、みんな何もいわないね。【そういう関係の人っていうのは、アイヌ関係の人っていう意味ですか？】いるんでしょ？　……けっこういますよ。だけど、本当のアイヌ血統だっていう人は、誰もいう人いません。【じゃあ、あまりご自身はそんなふうに自分のことを思ったりしてないっていうことですね？】そうだね。（アイヌ・老年・女性）
- これねえ、（北海道のアイヌ生活）実態調査も結構、去年だったかな、実態調査のあれ、ここの生活相談員の人がさ、新しい人だから、アイヌの人だったらどこに住んでいて何をやっているかってわからなくて、私、結構手伝ってやったんですけどね。やっぱり結構いるんだよね。白糠には。【そうなんですか。】いる。いるけど、みんな携わりたくない人ばっかり。「そういう人たちの話を聞くといいよ」って、「そうですか」って。【なかなかでも、そういう方は。】来ない。こういうところ（調査の場）にはおそらく。（アイヌ・老年・女性）

このように、本調査に参加するといったレベルも含め、アイヌ民族であることを表明することを避けようとする意識が強く存在することがうかがえる。一方で、一定のアイヌ民族の集住がある白糠であるからこそ、アイヌ性を積極的に打ち出そうという意識も見られる。

> 【（アイヌとして積極的に生きていきたいという）理由はありますか。】理由ね。だって自分が楽だもの。だってさ､自分は隠して生きてきたってどうしようもない。外見からそうだから。

だから積極的に生きているほうが、相手も受け入れやすいと思う。そういう意味。だから隠したことないです。だから病院に入院した時も、看護婦さんが来た時、一番最初に来た時「いや、看護婦さん、私はアイヌだからね。毛深いし、お風呂、みんなでたくさん入るところに入るのは嫌だから、あれしてください」といったら、「大丈夫、わかったよ」って、ちゃんと気を使ってくれる。それが、恥ずかしいけど、そういうふうに積極的にいかないと、何かこういうのも悲しいのかな。何だろうね。私の考えはこういう考え。【そのほうが。】自分が生きやすいというか。白糠にいるからそう思うのかなあ。これは地域差によるかもね。白糠とか阿寒とかさ。白老、あのアイヌの人たちがいっぱいいるところで暮らしている人たちは意外とこう思っているかもしれない。だけど、やっぱり違う人もいるかもしれないね。（アイヌ・老年・女性）

当然のことではあるが、積極的にアイヌ性を打ち出す人と、そうでない人がいる。ただ、アイヌ性を打ち出さない人々には、アイヌ性を打ち出さない理由が「白糠のアイヌの人は、自分からはアイヌだと言わない」といった、ある種の地域性に起因するものとして認識されていることがうかがえる。これに対し、アイヌ性を積極的に打ち出す人は、他にもアイヌの人々がある程度暮らしている地域だからこそ、アイヌ民族であることの困難にもそれなりの理解があることを前提とすることができ、配慮を要求することにつながっているととらえられる。あるいは、理解がなくとも、その理解を培っていくためにも、自ら積極的にアイヌであることを打ち出していくという状況も考えられる。

白糠町のアイヌ民族の集住の程度は、人によっては「アイヌであることを隠して生きている」と感じさせ、他方の人には「アイヌであることを積極的に打ち出して生きてる」と感じさせる、ちょうど中間の状況なのかもしれない。

第４項　アイヌ民族と和人との関係

このように、アイヌであることを表明するか否かは、白糠町という地域にどの程度アイヌの人々が暮らしているかが関わっている。それとともに、白糠町では、和人の側からアイヌ民族がどう位置づけられていたかも、当然ながらアイヌ性の表明には関連を持つ。そこで、アイヌ住民側から見た、白糠町におけるアイヌ民族と和人との関係の一端を確認してみる。

前節では、和人でも、漁業関係者などにはアイヌ民族との接点があるため、アイヌ民族への配慮がなされていたことに触れた。この部分に関して、父親が親方として漁業に携わっていたというアイヌ住民は、次のように語っている。

小さいころは全然、何かすごいいじめのあった白糠なんだけど、私はいじめられなかったのね。それは絶対に、お金があったせいだと思う、親が。……皆貧しい暮らしをしていた時に、ちょっとお金持ちの親方の娘だったから、いじめはなかった。でも高校行った時に、釧路の高校行った時に、初めて何か、白糠ってアイヌ人多いよねみたいな感じで、何か自覚したっていうか。（アイヌ・老年・女性）

このように、まわりのアイヌ民族の子はいじめられていたが、自分は親方の娘だったからいじめ

られなかったとの認識が持たれている。この点からは、和人の大人たちが、それぞれのアイヌ家庭にどう接しているのかを子どもたちが受け止め、いじめの相手を取捨選択していた様子もうかがえる。

また、現在60歳代のアイヌ住民は、小中学校に通っていたころのアイヌの子どもたちの数について、次のように語っている。

> そのころ50人1クラスで、6組か7組クラスがあったんだよね、50人いるうちの15ぐらいはアイヌの人だったと思うかな。【ということは、1学年で、100人はいかなくても、結構な人数の。】1学年で？いたと思う。【1学年6クラスですよね。】そう、6クラス、だと思う。【その子たちはいじめられてるとか。】あったよ。（アイヌ・老年・女性）

前節では、一般住民の側から、「アイヌの子は1～2割」という数字が示されていた。ここでの聞き取りは、これよりも多く、約3割だったと語られている。しかも、そのアイヌの子どもたちの何人かは、いじめにあっていたことも語られる。

このいじめについては、いじめられる対象とされるきっかけが、学校のなかにあったこともうかがえる。たとえば、次のような「学校貯金」の話が聞かれた。

> 白糠って、小さい時から、今はどうかわかんないけど、学校貯金ってあって、月1回、先生にね、（農業協同？）組合の貯金の通帳持って、何か、今日は貯金の日ですよみたいな日があったんだよね。今はないと思うよね。……それを持ってく子と持ってかない子がはっきりしてたのも、きっとアイヌだったと思う。アイヌの子は、そんなお金ないから、並べないんだよね。【それは額が決まってたんですか。】違う違う、好きなだけ。（アイヌ・老年・女性）

この学校貯金とは、現在、一部のJAで行われている「こども貯金」のことだと思われる。白糠町に比較的近い十勝池田町のJAのホームページには、「毎月25日に地元利別小学校にて『こども貯金』の集金活動を20年以上に亘って行っております」といった報告が載せられている[11)]。学校を通じて口座を開設し、決まった日に集金に来る職員にお金を預けるというものである。「子どもたちが貯金の仕組みを理解しお金や貯蓄の大切さを学ぶ」ことを目的としている[12)]。しかし、ここに並んで貯金ができないと、「お金がない」ということを表明することになる。それが、先程の「親方の娘だからいじめられない」ということとは対照的に、いじめを誘発する可能性を持つ。貯金そのものは推奨されることだとしても、これを学校で行うことで、貯金ができないケースが多いアイヌの子どもたちがいじめの標的にされるきっかけを提供することにもなっていたようである[13)]。

第5項　白糠町政への評価

一方、町政に目を転じると、一般住民の間では、白糠町の何人かの町長が比較的積極的にアイヌ民族を政策に位置づけてきたと評価されていた。しかし、アイヌ住民のなかでは、以下のような声が聞かれた。

・【アイヌと和人の方の交流の場、交流のあり方については、いま白糠では現状ではどんな感じでしょうか。】シャモと、アイヌの人との交流の場を設けるっていうことは。今もやってないよな。町長自体も何もしないしな。（アイヌ・老年・男性）
・【アイヌというものを白糠町の町づくりの柱にすることに関してはどうお考えですか。】そういうアイヌのことを中心にやってくれたらいいなあとは一応、思いますけど。今の段階では、そんなに。難しいかな。あの、白糠町の町長さんの話、どう思っているかはわからないですけどね。もうちょっとちゃんとしてくれたら、もうちょっとこの町は活性化するかなとは思うんですけどね。（アイヌ・青年・女性）
・どうせここにアイヌのチセも白糠にあるんだから、これをこういうふうにしているのはもったいない。じゃあ、どういうふうにしたらどうなのか。どういうふうにしたら輪が広がるのか。そういう方法を考えて、次にって、１個ずついろんな知恵を出してやった方がいいけど。【そういう点では白糠町はまだアイヌに……】ちょっとだめだね。（アイヌ・壮年・女性）

その一方で、白糠アイヌ文化保存会の活動に参加しているアイヌ住民は、次のように語っている。

・白糠町がね、すっごい、このアイヌに対して最近すごく緩和っていうか、学校にも出前授業っていうのを一生懸命教育委員会の方で協力してくれて、資料を提供してくれたりいろんなことをして、勉強を教えやすく、学校でも受け入れやすくされてるんですよね。町でね。【そうなんですね。】だからやっぱり、よくほかの市町村から言われるんですけど「どうして白糠は行政とアイヌがそんなに仲がよくできるの？」って。「私たちの町ではそんなことは全然、町は手伝ってくれないよ」っていう話をよく聞くんですけど、まずそれは、恵まれてきたなと思います。それもやっぱり、うちの母とかみんな先人の苦労の賜物だと思います。【なるほど。町長さんでも、人によってなんでしょうけど。たとえば、名前があがったなかではＣさんとか。】そうですね。そう、そう。自分はアイヌの血が絶対入ってるっていう感じだったんですけど。本当に一生懸命やってましたね。とてもアイヌの人との関わりが深かったですから。同級生にもたくさんいたし。そのなかでやっぱりいろいろとアイヌのことを勉強したんですよね。Ｃさんも。今のＴさんもそれをちゃんと引き継いでいろいろやってますね。（アイヌ・老年・女性）
・【学校教育のなかで、アイヌ民族のことをもっと教えていくっていうようなことは必要だと。】うん。教えること。本当は幼稚園の頃から少しずつね、言葉やなんかを教えていった方がいいと思う。白糠はね、学校年に２回ずつまわるようになって。踊りとアイヌ語と、それとムックリとかそういうのを教えて、まあ教育長と町長がすごい理解があるもんで、回ってるんだけどね。【なるほど】道内でも白糠くらいじゃないですか？【ああそうですねよね。】学校にこんな訪問したり。（アイヌ・老年・男性）

この点は、白糠アイヌ文化保存会のように、アイヌ文化活動に取り組み、行政と関わる機会があるかどうかが、町政への評価を左右することを示している。行政と関わる機会があまりなければ、行政は「何もしていない」という評価になるし、行政と関わる機会があれば、「一生懸命やっている」という評価になっている。このように「一生懸命やっている」と感じているアイヌ住民からは、「今

は、自分はそんなに差別はないんじゃないかなと思うんだ。割と。まあ町民のね、そういうあれもずいぶん協力してるしね」（アイヌ・老年・男性）といった声も聞かれるように、アイヌ民族が町内に適切に位置づけられているという感覚を与えることにもなっている。

ただし、このことは、逆にいうと行政の側が、ある特定のアイヌ民族の人々としか十分に関われていないことを示しているのかもしれない。本研究グループで同時に進めているスウェーデンの先住民サーミの調査では、サーミの代表的な生業であるトナカイ飼育をしているサーミの労働や生活を念頭に、サーミ政策が進められてきた状況がある。しかし、トナカイを飼育していないサーミは、自分たちの労働・生活にフィットした政策が実施されにくいことから、トナカイ・サーミを想定したサーミ政策のあり方に不満を持っている（新藤 2015）。これと同様の構図が、白糠町のアイヌ民族にも生じているものと受け止められる。白糠アイヌ文化保存会という団体をつくり、そこで活動していれば、和人が圧倒的多数派の町役場[14]からも、その取り組みは見えやすい。そのため、その見えやすいところに、町からの支援も行き渡りやすい。その反面、町役場から見えにくいところにいるアイヌの人々には、町からの支援は届きにくい。そのことが、「町は何もしていない」という評価につながっているものと推測される。

第６項 「血統」間の差異

また、スウェーデンのサーミの場合は、非トナカイ・サーミからのトナカイ・サーミ中心のサーミ政策への批判とともに、サーミ集団を代表することになっているトナカイ・サーミ自体への非難の声も聞かれた。つまり、「非トナカイ・サーミは、トナカイ・サーミから差別されている」ということである（新藤 2015）。これとやや似通った問題として、以下のような「血統」間の差異の話が聞かれた。

> 親戚中から、アイヌはそのＩ血統からは、何で（アイヌ協会に）入ってんだってすっごい怒られて。私の血統はアイヌっていうのを認めてない、何か、自分はアイヌの顔はしてるよ、皆ね。だけど、何であれ認めなかったんだろうね。【Ｉ血統っていうのはやっぱり、１つの勢力としてあって。】あったあった。【またなんとか血統ってあったんですか、そういうのはわからないですか。】アイヌの間では、Ｉ血統が一番きっとすごいと思う。私のじいちゃんとか、今の生き字引の、私の母親のいとこなんだけど、うん、そうだと思う、アイヌの間では結構。【それはやっぱり。】ちゃんと頭がよくて働いてみたいな。【やっぱり漁業で成功してたっていうことですね。】そうそう。おじいちゃんの代がね。【だから、かえって自分たちは、すごく真面目に働いてこんなにやってんのに。】そうそうそう。【お前たち何やってんだみたいな、何だらしないんだみたいな、あいつらと一緒にされたくないみたいな。】ああ、そうそうそう。【そういう感じだったんですか。】だったと思う。【だから、そうやってアイヌ協会に入られたことに対して、すごく。】もうすごかった。（アイヌ・老年・女性）

この聞き取りからは、白糠町のアイヌ民族の有力な「血統」には、アイヌ協会などを通じて、アイヌとしての権利や生活向上を目指す者と、アイヌであることとは無関係に、生産・労働活動などを通じて生活向上を図ろうとする者とが存在することがうかがえる。この女性の場合は、アイヌで

あることとは無関係にやっていくことを目指す「血統」に生まれながら、アイヌとしての向上を図るアイヌ協会の人々の活動に参加したことで、「血統」内から非難されたということである。

このことは、アイヌ性の表明に消極的であることが、単にいじめや差別などの経験から発するだけではなく、むしろアイヌであることに頼らずに、エスニシティとは無関係に生きようとする意識からも生じていることをうかがわせる。それと同時に、アイヌ民族内にも「血統」という、いわば「イエ」のようなものが存在していることもとらえられる。サーミの場合にも、一部の有力な家系の出身者が、サーミ社会内で影響力を発揮しているとの話が聞かれた（新藤 2013）。これと同じような状況が、アイヌ社会内にも存在すると受け止められる。

まとめ――エスニシティ間・エスニシティ内の評価の差異

それでは最後に、本章の分析から導かれた知見について、確認しておきたい。

第１に、和人を中心とする一般住民の側では、白糠町ではアイヌ民族と和人との交流は「ごく普通に」行われていると受け止められていた。ただし、それは、日常的に付き合う人々のなかにアイヌ民族であることを意識しなければならない人があまり含まれていないことにもよっている。そのため、アイヌの人々が多く関わる漁業の関係者や、アイヌであるか和人であるかを問わず子どもたちが集まる場である学校に通っている時期には、アイヌ民族の存在を意識する経験を有する者が多かった。とくに、漁業関係者の場合、自身が、相手をアイヌ民族だと意識していることを感じさせないような配慮を行っていた。

第２に、アイヌ文化の振興については、白糠町の方向性は高く評価されていた。白糠町では、合併協議から離脱した後、足元を見つめ直してまちづくりを図るということで、アイヌ文化が重視されるようになった。また、それ以前から歴代の町長がアイヌ民族への理解が深く、町政でもアイヌ文化が位置づけられてきた素地があった。現在も、町内すべての小中学校での「アイヌ文化出前講座」などを通じて、一般住民の側にもアイヌ文化が重視されている状況が伝わっていた。アイヌの三大祭りへの参加にはハードルを感じる住民も少なくないが、総じて、白糠町でアイヌ文化の振興が図られることには、肯定的な意見が多かった。

その反面、第３に、生活補助については、否定的な見解が多かった。現在、白糠町では、独自のアイヌ民族に対する生活補助は行われていない。にもかかわらず、「白糠のアイヌの人は補助金を返済しない」といった「事実誤認」の声も聞かれた。文化に関しては、和人とアイヌとでは異なるので、アイヌの文化も振興することには賛成だが、生活面では、アイヌであろうと和人であろうと条件は同じであり、特別扱いはすべきではないという意識が持たれていることが推測される。

一方、アイヌ住民の立場から見ると、第４に、アイヌ性を積極的に打ち出す可視性の高いアイヌの人々と、アイヌ性を表に出さないアイヌの人々が存在していた。このことを、白糠町の文脈にひきつけると、アイヌ性を積極的に打ち出す人々は、白糠アイヌ文化保存会などの活動に関わり、白糠町役場との連携の機会も多くなっていた。そのため、白糠町政への評価も高くなっていた。

また、第５に、アイヌ性を打ち出すか否かについては、白糠町でのアイヌ民族の集住の程度が関わっていた。白糠町にはそれなりにアイヌ民族が暮らしており、一定の理解が見られると感じられれば積極的にアイヌ性を打ち出せるし、白糠町のアイヌの人々はそれほど目立っていないと感じていれば、アイヌ性を打ち出すことには消極的になっていた。このような両方の判断に分かれるよう

な中程度の集住性を持つのが白糠町であると受け止められる。

ただし、第６に、アイヌ性の表明に消極的な人々のなかには、自身が属する「血統」が関わりを持つというケースもうかがわれた。つまり、白糠町のアイヌ民族のなかには、アイヌとしての生活向上と距離を置こうとしている有力な「血統」も存在しており、この「血統」の人々は、アイヌ協会といった団体を通じてアイヌ政策を要望することに否定的であった。白糠町でのアイヌ協会をめぐる考え方の違いのなかには、このような「血統」の違いが関わっていることも推測される。

白糠町という地域に焦点をあてた場合、アイヌ民族をめぐる状況に対する評価は、アイヌ民族と和人というエスニシティ間の差異とともに、アイヌ民族という同一のエスニシティ内の差異としても生じていた。とくに、エスニシティ内の差異は、本研究グループで進めているサーミの調査研究からも見出されている。今後は、このエスニシティ内の差異などを中心に、アイヌ民族の集住地域間の比較研究、アイヌとサーミという民族間の比較研究へと進めていきたい。

注

１）聞き取りでは生年を明確に答えていたが、個人の特定を避けるため「昭和 20 年代」と改めた。

２）国勢調査のデータで白糠町（白糠村）の人口を確認すると、1950（昭和 25）年に 16,711 人、1955（昭和 30）年に 17,412 人、1960（昭和 35）年に 20,770 人、1965（昭和 40）年に 18,295 人で、1960 年の２万人を少し上回る数字がピークとなっている。

３）「北海道ウタリ福祉対策」（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構ホームページ（http://www.frpac.or.jp/about/details/84-3.html，2015.3.28 取得））。

４）「アイヌ民族に関する国・北海道・市町村の施策」（札幌市アイヌ施策推進計画検討委員会資料（http://www.city.sapporo.jp/shimin/ainushisaku/kaigi/documents/01_shiryo3.pdf，2015.3.28 取得））。

５）「北海道ウタリ福祉対策」（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構ホームページ（http://www.frpac.or.jp/about/details/84-3.html，2015.3.28 取得））。

６）「アイヌ民族に関する国・北海道・市町村の施策」（札幌市アイヌ施策推進計画検討委員会資料（http://www.city.sapporo.jp/shimin/ainushisaku/kaigi/documents/01_shiryo3.pdf，2015.3.28 取得））。

７）「アイヌ民族に関する国・北海道・市町村の施策」（札幌市アイヌ施策推進計画検討委員会資料（http://www.city.sapporo.jp/shimin/ainushisaku/kaigi/documents/01_shiryo3.pdf，2015.3.28 取得））。

８）2015 年 2 月 23 日に行った白糠町教育委員会社会教育課文化振興係での聞き取り、および同 24 日に行った白糠町立白糠小学校での聞き取りより。

９）なお、白糠町でのアイヌ文化学習については、別稿で詳細を報告する予定である。

10）2014 年 6 月 26 日に行った白糠町福祉課、白糠町教育委員会社会教育課文化振興係での聞き取りより。

11）「こども貯金～子供達にお金の大切さを～」（JA 十勝池田町ホームページ（http://www.ja-tokachiikedacho.or.jp/news/news120806_01.html，2015.3.29 取得））。

12）「こども貯金～子供達にお金の大切さを～」（JA 十勝池田町ホームページ（http://www.ja-

tokachiikedacho.or.jp/news/news120806_01.html, 2015.3.29 取得））。

13）なお、白糠町を範域の１つとするJAくしろ丹頂のホームページには、「こども貯金」に関する記載はない。

14）町の職員として働くアイヌ民族の人も、若干存在するようである。たとえば、「役場にも１人、アイヌの女の子がいるんだよね」（一般・老年・男性）、「白糠は、役場とかにも、（アイヌの血が）薄い人はやっぱりいるよね」（一般・老年・女性）、「白糠町の役場にも（アイヌの人が）いるんじゃないのかな、今は」（一般・壮年・女性）などの話が聞かれた。

参考文献

松本成美・白糠地名研究会 , 1985,『白糠のアイヌ語地名』白糠地名研究会 .

小内透 , 2010,「問題意識と調査の概要」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その１現代アイヌの生活と意識――2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター , 1－6.

小内透編著 , 2014,『調査と社会理論・研究報告書31　伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室.

新藤慶 , 2013,「サーミの生活と復権をめぐる運動」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書31　ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 87－104.

――――, 2015,「サーミの社会意識と政治意識」野崎剛毅編著『スウェーデン・サーミの生活と意識――国際郵送アンケート調査結果からみえてくるサーミ像：教育、政治、差別、メディア』札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科 , 44－70.

白糠町ふるさと教育実践発表会実行委員会 , 2014,『白糠町ふるさと教育実践発表会開催要項』.

竹ヶ原浩司 , 2008,「『しらぬかアイヌ文化年～ウレシパ　シラリカ～』の取り組み」『月刊公民館』616 , 4－8.

（新藤　　慶）